

## 江戸時代の随筆をめぐって

### ESSAYS IN EDO PERIOD

日 野 龍 夫\*

The essays in early-modern ages have the wide variety of the contents.

Among these essays, there is one group which study historical evidence about the very small part of manners and customs.

Manners and customs of the life of the ordinary people and their origin and the daily happenings — they seem to be unimportant at a glance — were recorded minutely in this group. What kind of mind is hidden in them ?

People in modern ages had the abilities to abstract and grasp things. But people in early-modern ages didn't. They had the abilities, that is, the materialistic abilities instead.

I suppose these essays were written by these materialistic abilities. The writers found the extreme luxury in the minute things.

They saw the height of prosperity in these minute manners and customs and had the anxieties that it would decline in a short time.

---

\*HINO Tatsuo 京都大学教授。「宣長と秋成 — 近世中期文学の研究 —」(筑摩書房、1984年)、新日本古典文学大系「江戸繁昌記・柳橋新誌」(岩波書店、1989年)などの著書がある。

They caught the changes of manners and customs as the sign that would decline before long.

Surely those are the essays in early-modern ages that describe the anxieties of the times ?

随筆という分野は非常に学問的検討の対象になりにくいものです。「枕草子」とか「徒然草」とかいう古い時代のものは、ちょっと事情が異なりますので、それはおいておきまして、近世のもの、明治以後のものについて考えますと、随筆専門の研究者というものは、ほとんど存在しないのではないかと思います。研究者がおられない、あるいは極端に少ないということは、学問的に取り上げてこれを処理することが難しいということです。その理由は、随筆と呼ばれているものが、形式的にも内容的にも非常に雑多で、体系づけてまとまったことをいうことが困難であるということになるだろうと思います。

現在、「日本の名随筆」（作品社）という全百巻のシリーズが出ております。1冊ごとに花・鳥・酒・旅というようなテーマをもうけ、それにかかわる近代・現代の人の文章を集めています。この「名随筆」という叢書の中に実際入っているものを見てみますと、狭い意味の随筆の枠をはみ出すもの、例えば評論とか、ある書物の解説とかも入っています。またご本人はれっきとした学問的著述として書いておられる、そんなものまでもこの叢書に入っております。

こういうふうに雑多で、統一的に把握しにくいという事情は、近世の随筆についても同じことがいえます。近世の随筆を一番たくさん集めたものとしては、「日本随筆大成」（吉川弘文館）という三期にわたる膨大な叢書があります。これの中を見てみますと、今日的な狭い意味での随筆に該当するものも、もちろんいくつかありますが、それ以外に、例えば自分が読んだ書物の抄出、その抄出にちょっとした批評感想をつけ加えたたぐいのもの、風俗の変遷の考証、それも古い上代ぐらいの様々な風俗考証から近世以降に限定したような風俗考証、

あるいは、自分が見聞きした出来事の記録、見聞記といった、実に種々雑多な内容のものが含まれております。これを学問的に処理しようというほうが無理だというぐらい、その内容は混沌としております。

しかし内容が種々雑多で専門の研究者がいらないということは、決して重要な作品がないということではありません。近代の場合でしたら、柳田国男の業績を随筆というふうにいつてしまうと、これは少々穩当を欠きますが、随筆風ということはいえると思います。柳田国男の著述などを含め、重要な随筆ないし随筆風の仕事というものは沢山あります。近世のものでも、狭い意味での随筆にあたるものとして、新井白石の「折たく柴の記」とか本居宣長の「玉勝間」、上田秋成の「胆大小心録」というような重要な作品があります。それらは文学として読むに耐えるものです。また、一般にはあまり知られておりませんが、漢学者が漢文で書いた随筆というものもかなりの数ありまして、その中には、今日の狭い意味での随筆の概念に当てはまる、優れた内容のものが少なからずあります。

それらとは別に、近世の随筆に顕著なものとして、先ほどもちょっと触れましたけれども、風俗の変遷を考証した随筆という一群の作品があります。それから、自分が見聞きした出来事を書きつづった見聞記風の随筆といったものもあります。この風俗考証の随筆と見聞記風の随筆は、私どもが近世文学の研究をしていく上で、常日頃お世話になっているものでございまして、作品の背景になっている風俗や出来事を考える上で、絶好の資料になってくれています。読むというよりは利用するという言い方のほうが当たりますが、しょっちゅう我々が参照するものです。これを、学問的に処理することが難しいというだけで放置しておくのはよろしくないと思ひまして、本日あえて近世の随筆というものを取り上げるわけです。

最初に申しましたように、近世の随筆は内容的にも形式的にもまことに複雑多岐にわたるたぐいの作品群で、後期になるほど数が多くなりますが、前期から存在しますので、ほぼ近世260 年間にわたってまんべんなく書かれておりま

す。土地も江戸、上方、あるいは地方にわたって書かれている、そういう膨大な作品の山ですから、全部まとめて取り上げて論ずるということは、とうてい不可能なことです。今日取り上げますのは、私どもがふだんお世話になっているたぐいの書物、つまり近世後期、文化・文政を中心とする時代に書かれた風俗考証の随筆、あるいは見聞記風の随筆、そんなものだけに限ってお話をさせていただきますこととします。「江戸時代の随筆をめぐる」というタイトルからしますと、ここで取り上げる範囲はまことに狭いのですが、こういうふうにしないと、とてもまとまったお話ができないというのが、つまり随筆というものです。

まず風俗考証の随筆、見聞記風の随筆というものが具体的にどういう内容のものであるかを、資料①で例に上げました。山東京伝の「骨董集」という随筆の目次の一部です。

## 骨 董 集

### 上編上之巻

好事の心得	行水船・居風呂船
昔の威儀附紺屋の白袴	石榴風呂附鏡磨
竹馬	伊勢の風呂吹
昔人の質朴	金龍山米饅頭
蝙蝠羽織図	目黒の餅花
冑人形	耳の垢取
旧吉原の雨中のさま	臙脂絵賣
髭男	釜磨并猫の蚤取
魚を呼びて斗々といふ	おほこといふことば
粉の看板	駒形の螢
豆腐の紅葉	浮世袋
ころばずといふ下踏	初雪の句
江戸の銭湯風呂の始	火燵并地火燵再考追加
風呂犢鼻褌	

最初の「好事の心得」、「昔の威儀附紺屋の白袴」というのは、書物の出だしで、ちょっともっともらしいことをいっておりますからこの二つを除きます。あと



は「竹馬」「昔人の質朴」「蝙蝠羽織図」「冑人形」「旧吉原の雨中のさま」「髭男」「魚を呼びて斗々といふ」「粉の看板」というように、およそどれ一つ取り上げましても、天下国家に影響がないというか、あえていえばどうでもいいようなことが取り上げられ、項目として並んでおります。

それらがどういうふうに考証されているかということ、例えば「耳の垢取」という項目があります（資料②）。

#### ○<sup>みみ</sup>耳<sup>あかとり</sup>の垢取 二十

江戸鹿子<sup>貞享四年板</sup>「<sup>みみ</sup>耳垢取<sup>あかとり</sup>、神田紺屋町三丁目長官<sup>こうやちやうくわん</sup>」とあり。おなじ比京<sup>ころ</sup>にもあり。

京羽二重<sup>貞享二年板</sup>「<sup>みみ</sup>耳垢取<sup>あかとり</sup>、唐人越九兵衛<sup>たうじんこし</sup>」とあり。初音草嘶大鑑<sup>元禄十年板</sup>卷之五に、「京と江戸ゆき、すぐなる通町<sup>とほりちやう</sup>の辻々<sup>つじつじ</sup>をみればあるひは齒ぬき耳<sup>はみみ</sup>の療治<sup>しかじか</sup>云々」老人養草<sup>正徳六年板</sup>に云く、「近來京師<sup>きんらいけいし</sup>の辻々<sup>みみ</sup>に耳垢取<sup>あかとり</sup>とて紅毛人<sup>おらんだじん</sup>のかたち<sup>に</sup>に似せて<sup>しかじか</sup>云々」とあれば、元禄<sup>すゑ</sup>の末正徳<sup>ころ</sup>の比までもありしなるべし。

#### 五元集拾遺

観音<sup>みい</sup>で耳をほらせてほとゝぎす 其角

此句も耳垢取<sup>このく みみあかとり</sup>のことをいへるなるべし。

一代男後日<sup>刻板</sup>の年號なし。按ずるに、西鶴<sup>まつら</sup>が廿五年の追二<sup>がたひらど</sup>之卷に云く「松浦湯平戸といふ所<sup>ど</sup>善といふことあれば、享保二年の板なるべし。二之卷に云く「松浦湯平戸といふ所に、わづかなる草<sup>や</sup>の屋<sup>しかじか</sup>をかりて云々。髪<sup>かみ</sup>を惣<sup>そう</sup>なでつけにして長崎一官<sup>ながさきいつくわん</sup>と名<sup>な</sup>をつき、<sup>みやこ</sup>都<sup>みやこ</sup>ではやる耳<sup>みみ</sup>の療治<sup>れうじ</sup>人<sup>にん</sup>の似<sup>に</sup>せをして、京の一官<sup>くわんがお</sup>顔<sup>しかじか</sup>して云々」か、れば当時京<sup>そのころ</sup>に一官といふ耳<sup>みみ</sup>の垢取<sup>あかとり</sup>ありしならん。

これは街頭を流し、求めに応じて人の耳垢を取るという、ちょっとおかしい商売を考証してあるわけです。文章はここに上げてあるので全文です。この後に画証として、実際耳の垢取りが路上で人の耳垢を取っている場面の挿絵が加えられております。ゴシックで書いてありますのが書物の名前です。つまり、耳の垢取りという、そういうものが存在したところで、あるいは消滅したところで、天下国家の動きとはあまりかかわらないような、庶民生活の小さな風俗、そういうものを考証するのに、わずかこれだけの文章の中に京伝は、「江戸鹿子」「京羽二重」「初音草嘶大鑑」「老人養草」「五元集拾遺」「一代男後日」と、実に六つの書物を引用いたしまして、一生懸命、耳の垢取りという職業が

存在し、それが人々の生活の中に根付いていたのだということの考証につとめているわけです。まことに博搜これ至れりというべきでしょう。この「骨董集」という書物は、こういう調子で、些細な民間風俗について大真面目に、博搜の労を厭わず、一生懸命考証を展開するという、そういうたぐいの書物です。

「只今御笑草」(資料③④)という随筆は、二世瀬川如皐という歌舞伎作者の随筆です。これには、大道芸人というまでも至らないような、ほとんど乞食に近いような、街角でちょっとした芸をやったりなんかして人々に物乞いをするという人々、自分が若い頃、時代は明和・安永頃見聞した、庶民の中でも最も階層の低い、そういう生業の人々について、一つ一つ挿絵入りで説明をつけています。この本によって、どうでもいいといえば、いいということになりますけども、明和・安永頃の江戸にどんな乞食がいたかということを、絵まで加わった形で詳しく知ることが出来るわけです。内容は、資料③の「長松小僧」、資料④の「すたすた坊主」ともに、まあ真面目に読んで説明するのが馬鹿々々しくなるような、そういうたぐいの資料です。

#### 長松小僧 (右図)

長まつ小僧といふ物貰ひは、人もよく知りて、其比、抱守りなんどの嬰兒をすかしものするとて、長まつ小僧はねんねこよ、なんどいひしを、いと近き安永、天明の比までもありけると覚へし、こは、中ぜい成男の四十計りなるが、片手には三升入とかいへるぬり樽の古きに、紙にてこしらへたるじようご口にさし、もらひたる米錢これに入る、の料とせり、左り手には、二尺計りにて、いと清げにて、新たにしたてたる禿人形の髪なんどうつくしく、……



すたすた坊主（右図）

今も折ふしには見受る者ながら、明和の初迄は数多ありて、町々をあるきものせる、そのさまあか裸にて、しでさげたる注連の加き者を腰の程に巻、大注連の如く拵たる藁の鉢巻しめ、やれ扇、錫杖を持、さもいさましくおどりものして、

すたすたやすたすたや、すたすた坊主の来る時は、世の中よいと申ます、とこまかせてよひとこなり、お見世も繁昌でよいとこ也、旦那もおまめでよひとこ也、とこまかせてよひとこ也、其外にもよいとこ尽しをしゃべりものして、門々をおどりあるけり、

かせげたゞ  
幕惜む年や  
藁の座



全部でたしか40人ぐらいの乞食まがいの芸人を、挿絵入りで考証、というよりは見聞ですが、それを集めた書物です。

資料⑤は、喜多村筠庭という、幕末の考証随筆家としては著名な人ですが、この人の「きゝのまにまに」です。これは考証随筆ではなく、自分が直接見聞した社会の出来事を記録したものです。

△寛政十一年乙未、正月廿九日、三河町出火、神田辺数町焼、是に依而後に鎌倉河岸町家後へ寄て河岸通広路と成、

○二月十五日より三囲稲荷開帳、奉納物飾付と云絵本に作り印行して売る、但作物は御所車などの外、大造のものはなけれど品数多し、参詣群集せり、大川橋往来多く、三月十五日には渡

銭三十八貫文在之、十六日には二十貫余と云、武蔵屋は金二十六両ありしとぞ

○聖堂御再建境地広がる、林大学頭聖堂御主法之義申立候趣入御聴、重々尤之次第思召、其趣を以尚追々取計候義可申上候……

○今年二月、肥前島原山津浪出て地震す、御城付五百石過半流失、死人多し、山焼出、海山之大変也、

○当夏江戸は桃之実多く出来て、価殊之外下直也、翌年は実少かりしが大さ今年に倍せり、

○本草家小野蘭山、京都より召れ、当年七月廿八日御納戸格にて初而御目見、三十人扶持被下

○靈岸島埋立地に蝦夷地産物会所立、

○谷原村長命寺山内ユツリハの木の瘤、人面に似たりとて見物人出、  
ユツリハは交譲木と云とぞ、もとより樹に瘤多者なり、奇なるにあらず、

これで見ますと、寛政十一年正月29日に火事の件があります。2月15日から  
の三囲稲荷開帳のことが書かれております。それから「聖堂御再建境地広がる」  
という一件。今でもお茶の水駅のすぐ近くにありますが湯島の聖堂が再建され、  
広くなったということが書かれています。それから、これはまあ他国のことで  
すから直接見たわけではなく、噂が伝わってきたのですが、「肥前島原、  
山津波出て地震す」という記録があります。その次は、江戸で桃の実が豊作で  
値段が下がったということ。それから、小野蘭山という本草家が京都から召さ  
れ、幕府に仕えることになったということ。次は靈岸島埋立地に蝦夷の産物会  
所が立ったという件。それから長命寺のゆずりはの木に人の顔に似た瘤が出来  
たという件。

今日の我々が、何かこういう年代記風の記述を試みるとしますと、おのずか  
ら取捨選択の意識がはたらきます。例えばソビエトのクーデターの顛末を記述  
するとしますと、政治的といいますか歴史的な位置づけを行って、さまざまな  
出来事を取捨選択して記述するはずですが、これらの随筆の場合には、そうい  
う取捨選択の基準が全くありません。あるのは、自分が見聞したということ、  
それだけが基準です。物事の位地づけを行わないで、自分が身聞したという基  
準だけによって出来事を羅列する。そういうたぐいの記述になっております。

「骨董集」「只今御笑草」「きゝのまにまに」、それぞれ内容はかなり異なり  
ます。異なりますが、ある共通した特徴をつかみ出すこともできるわけで、あ  
まり天下国家にかかわらないような庶民生活の由来、風俗、出来事、そんなも  
のを克明に考証したり記録したりするという、こうした作品の背後にはどのよ  
うな精神があるのか考えてみたいというのが、今日のお話の目的とするところ  
です。

とりあえず手がかりになるのは、それぞれの随筆の序文です。序文は、この

書物はどういう意図で書かれたのかというようなことを、作者みずから説明して書かれております。本当はそんな序文がない方が随筆らしく、事実、ない随筆も多いのですが、版本の随筆の場合にはやはり序文がないと様になりませんので、序文があります。資料⑥は先ほど取り上げました「骨董集」の、これは序文ではなくて、作品の途中に「おほむね」という凡例めいたものが入っていて、その一節です。

かゝるかたにこゝろをよせたるものねざしは、質<sup>すなは</sup>朴なるいにしへのありさまを  
まねび、衣服<sup>きもの</sup>、飲食<sup>をしもの</sup>、調度<sup>てうど</sup>やうのものまでも、身のほどにすぎたることなせそと、  
いへのめこらにをしへさとさんとしてしつるを、またおなじすぢのことこのむ人にも  
見せまほしうおもひなりて、こたみありまきにさへとりなせしは、いといとえうな  
きわざにこそ。

およそ正史実録のふみは、おほやけごとをむねとして、わたくしぎまのいさゝけ  
きことにはかゝはらぬものなれば、ふるき代のたみの手ぶりなどかうがへんたより  
となるべきはすくなし。ものがたりさうしのたぐひは、そらごとづくりいでたるも  
のから、をりにふれしありさまいへるは、まのあたりそのころのことどもうち見る  
ばかりにあかしとすべきがおほし。

前半には、要するに、家の子供たちに贅沢を戒めるため、昔からの風俗の移り  
変わりの考証を著したのだ、ということが書いてあります。贅沢を戒めるとい  
うようなお説教調の文章は、近世の書物には頻出します。あまりしょっちゅう  
出てくるものですから、我々はそういうところは読みとばしてしまいます。内  
容の具体的な考証の部分だけを読んで、それを利用するに終わってしまう。ど  
うせ建て前的なことが書いてあるに違いないというわけで、こういう「おほむ  
ね」などというところは読みとばしてしまいます。京伝がこのお説教で本当は  
何をいいたかったのかということは、あまり真面目に考えません。

後半には、次のようなことを書いています。正式の歴史書は、「おほやけご  
とをむねとし」ているため「わたくしぎまのいさゝけきこと」は書かれていな  
い。自分は「わたくしぎまのいさゝけきこと」に関心があるのだ。だから正史、  
おおやけの歴史書は、自分にとっては有益な資料にならない。ここでは「もの  
がたりさうしのたぐひ」といっていますが、これは時代が下れば「耳の垢取」

でみずから実践しているようなたぐいの書物のことで、おおよきの「正史実録」とはレベルの違う書物に関心を向けることをいっています。同じようなことは、資料⑦「近世奇跡考」の凡例にも記されています。これは「骨董集」に先立って山東京伝が著した考証随筆です。

凡正史といへども、おほむねを記せるものは、こまやかなることを見むには便すくなし。源氏物語はそらごとの書なれど、其代の事を考えるには、たれも引もちうるごとく、浅井了意、井原西鶴等がたはれ書、雛屋立圃、菱川師宣等がざれ絵のたぐひも、その代のおもむきをもてかけるは、いにしへをまのあたり見るごとき事ありて、証とすべき事おほかり。そのゆゑに俗書といへども、実とおほしきはとりもちるぬ。引もちうる書名の下に、上木の年号ををしるすは、それぞれの時代をしらしむべきためなり。

ここでは「こまやかなること」という言い方をしていますが、正史はそういうことを「見むには便すくなし」といい、「源氏物語」、近世のものでは浅井了意、井原西鶴、雛屋立圃、菱川師宣といった前期の小説作者や絵師の名を上げ、それらの人々の作品は「こまやかなること」を考える上で役に立つと述べる。「骨董集」の「おほむね」、「近世奇跡考」の凡例において、京伝が述べている二つのこと、贅沢をしてはいけないという戒めのためにこの書を著すということ、それから「わたくしぎまのいささけきこと」「こまやかなること」、つまり民間の取るに足らない風俗、出来事、そんなものに自分は関心を寄せるのだということ、この二つのことをどう意味づければいいのかということ、を考えようと思うわけであります。

二番目のほうの「わたくしぎまのいささけきこと」「こまやかなること」とは、つまり些細な、うたかたのように浮かんでは消えてゆく民衆の生活の中のちょっとした風俗、出来事、そんなものに強い関心を寄せるということでありますけれども、それは京伝に限らないことです。今日対象に取り上げております文化・文政期の考証随筆あるいは見聞記には、共通して認められる精神です。資料⑧「賤のをだ巻」、

何事も古き世のみぞしたはしき、と吉田の法師が申置侍るも実にさる事にて、老の浪たゝむ月日のかげそふにつけて、立も帰らぬ昔のみ、朝夕に思ひ出らるゝも老の習ひなるべし、よの中の移り行有さま、昔のよき事もあしき事も、今の世のあしきもよきも、けふより生れ出たらん子や孫らは、しらでこそ過らめ、(中略) 是につけて、春の日の暮がたき俣に、老のねぶりの隙もとめて、心に残りしいにしへの事どもかいつかねて、子や孫らが生さき遠き世に思ひ合せて、ふるきをたづねてあたらしきを弁へ侍る媒ともなり、又永き代の末に、翁がいにしへも思ひ出よかしと、硯にむかひて、そこはかとなくつらね侍るも、例のよしなし事なるべし、

享和二年春の末つかた

埋木の人しれぬ翁誌

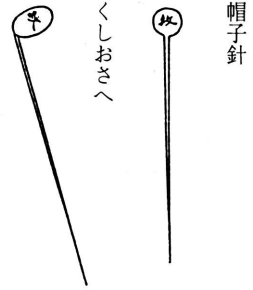
これも近世中期から後期にかけての風俗の変遷を見る上で、私どもがしばしば利用する書物の一つですが、森山孝盛という旗本が書いた随筆の序文です。「何事も古き世のみぞしたはしき」という「徒然草」の一節をまず引いて、「是につけて、春の日の暮がたき俣に」以下「そこはかとなくつらね侍るも、例のよしなし事なるべし」まで、自分が見聞してきたことを書き付けておくから、これをもって子や孫らの戒めとせよ、といている。古きをたづねて新しきをわきまえる。そういう材料となることを願うというわけで、「骨董集」のようにはっきりとはいっておりませんが、これもやはり、風俗の変遷をたどることによって世の中が段々贅沢に赴く、それを戒めるという意図をもって書かれている随筆です。そういう、教訓という建て前的な立派な目的を掲げているながら、というか、掲げておいて、具体的な内容になると、非常に煩瑣な、微細な風俗に目を止めた記述が続きます。その例にあげたのが資料⑨で、女の帽子について述べています。

昔は女の帽子と云ものをかぶりて歩行たり、綿帽子は年季三四十以上の女のかぶるものにして、若き女は白に紅のうらを付てかぶりたり、扱其ほうしをとむる針を、銀にて物好に拵へ、鼈負のかぶき役者の紋所などをうたせてさしたり、其後又、櫛おさへと云もの流行出たり、

帽子針

但し、物好次第、梅、桜、菊などの花も有、字も有

くしおさへ



櫛おさへも、銀にて、紋所あるひはさまざまの物好をうたせたり

初めに掲げた、風俗の変遷をたどり、子や孫たちの贅沢の戒めとするということと決して矛盾はしませんが、それにしても目のつけどころが非常に細かい。女の帽子、さらにはその帽子を髪に留めるための針、帽子針、櫛おさえなどという細かなところに目をつけ、しかもそれを挿絵入りで書こうというわけです。もちろん最初に掲げた贅沢を戒めるという意図は間違いのないところでしょうが、同時に、微細な風俗それ自体に関心があるということも疑いのないところだと思います。

資料⑩「反古染」、これもやはり旗本の随筆です。

享保の半頃、小袖の染色は、黒、黒飛、黒媚茶、きてん、煤竹、元文の頃、檳榔子、栗梅、藍みる茶、木賊色、宝暦の頃、御納戸茶、千歳茶、煤竹、明和の頃、留り紺、桔梗、藍鼠、花色、安永、天明のひわ茶、青茶、紫飛、小紋は、花色の桜ほうふり、あられ小紋、藍鯨小紋、きてん返し、鶴の目返し、茶小紋……

「享保の半頃、小袖の染色は」に始まって、安永・天明の「ひわ茶、青茶、紫飛」、ここまでが染色、それから小紋に移って「花色のさくらほうふり」以下。これらがどんなものか具体的なことは、私はまったく存じませんが、何もここまで詳細に書かなくなっていくじゃないかと思うくらい、それぞれの時代における流行の染色とか小紋といったものを逐一羅列しなければ気が済まない。

今日の我々でしたら、風俗の移り変わりを考察する際には、もうちょっと違う考え方をします。例えば高校生の大学進学率がどうだとか、風俗の移り変わりを数量によってもっと的確にとらえるというようなことをします。我々が風



俗の移り変わりを書くとしたら、そういうような方法を取るのが普通ではないかと思います。そういうことが可能であるようなものの考え方の訓練を、近代以後に生まれた我々は受けているということでもあります。また、そういうことが可能になるような情報が手に入る、日本全国はもとより全世界のことまでも時間をおかずに知ることが出来る。そういう、考え方の訓練と情報の普及、それによって我々は、風俗の変遷を論ずる場合だけに限らず、物事を図式化したり数量化したりする、要するに物事を抽象化してとらえるということが、我々は出来るようになっております。それは文明の進歩の一側面ですが、物事を抽象化してとらえることが出来るようになったということは、その反面、物それ自体を受けとめる能力、物それ自体を感じる能力、そういう言葉があるかどうか存じませんが即物的能力と、今日のお話では仮に名付けるとすると、即物的能力が衰えるということでもあると思います。

江戸時代の人々は、物事を抽象化する近代科学の未発達な時代、情報というものがある形では手に入らない時代に生きているわけであります。だから頼りにすることが出来るのは自分の経験だけです。自分が耳で聞き、自分が目で見、自分が感じたこと、それだけが頼りです。今日の我々のように、物事を抽象化する能力がない、そのかわり我々に比べればずっと豊かな即物的能力をもっていた。それがこういう、物それ自体への傾斜、「反古染」の、各時代における色や小紋の柄の記述に現れているのだと思います。こういう記述の背後にあるのは、近世人の、我々に比べればまだ衰えていなかった即物的な能力の現れではないか。物それ自体への興味、それが微細な風俗の移り変わりへの強い関心になって表れるのです。

「きゝのまにまに」(資料⑤)の、およそその出来事の、歴史的な意義付けというようなことには無関心な記述、ただ自分が見聞したというそれだけを基準に年代記を作ってしまうという精神。信じているのは自分の直接の体験、見聞だけである。そういう姿勢がこういった記述に表れているのだと思います。

山東京伝があげた二つの方針のうちの後の方の「わたくしぎまのいさ、けきこと」「こまやかなること」に関心を寄せるとするのは、近世人の、近世以後には失われてしまった即物的能力の現れであるということを、まず押えておきたいと思います。その上で、贅沢の戒めという、我々にはもはや建て前的な説教としかうつらないような主張、これに改めて目を向けたいと思います。

だいたい今日取り上げております近世後期の考証随筆、見聞記には、あるパターンがあります。それが最も典型的にあらわれている例が、資料⑪の「飛鳥川」という、これも旗本の随筆です。序文に次のごとくあります。

予老年におよび、享保よりの事を考るに、風俗のかはりたる数をしらず、あまり風土の違ひし事思ひ出し、あらましをしるす、享保半までは、昔の形も少しは残りますが、宝暦に及び、凡三四十年以来、風体変化す、文化になりては、猶更、おもしろい事、おかしい事、其外云もさら也、きのふは栄へおごりて時をうしなひ、世にあひしたしかりしもうとくなり、世の有様みな花となり、先いそぎする人の心々、見付計能持あそびに不限、目にたつ様にとりこしらへ、ものごとあさまになり、

「先いそぎする人の心々」とは、珍しいもの、華やかなもの、流行の先端をひたすら追いかける、そういう落ちつきのない人々をいっているのでしょう。「見付計能持あそびに限らず」の「見付」は、「見かけ」ということだろうと思います。万事につけて、「目にたつ様にとりこしらへ、ものごとあさまになり」云々といっています。享保頃までは昔の部分が残っていたが、宝暦以後、江戸はすっかり変わってしまった。文化・文政に至って、どんどんその変化のテンポが早くなっていったと述べています。

これが今日取り上げています随筆にだいたい共通して見出たされる認識のパターンです。宝暦元年にある人が生まれたとしますと、宝暦元年は1751年ですからちょうど18世紀半ば、真ん中です。その人は二十代から三十代にかけて、安永・天明の田沼意次の放漫な施政による江戸の繁栄を体験することになる。それから三十代の終わり頃に寛政の改革という厳しい締め付けの政治を体験します。そして五十を越えたあたりで文化文政の文化の爛熟期を経験することになります。そういう人が、五十才六十才になって自分の来し方を振り返り、世

の中がだんだん贅沢になって嘆かわしいことだと述懐するというのが、この時期の風俗考証の随筆、あるいは見聞記の姿勢です。

もちろんこれは、宝暦元年に生まれた人が随筆を書いたとしてという仮定に立ってのことで、前後の幅はあります。先程取り上げた「反古染」の場合ですと（資料⑫）

予、享保の初生れ、天明の今、六拾余歳、過來し昔を思へば、擬も夢也、現也、五十年來の変化をつらつらと案るに、わけて衣食住の三ツ、治れる御代の豊かに、綾羅錦繡を、卑となく貴となく身にまとひ、口に百肴の厚味、市店を並べ、家居の結構、物数寄の住居、隠れ家の風流、筆に尽すべからず、人々の行状、御堅固珍重之堅人は西国の波に漂ひ、不届推参の怒りは奥羽の山に埋れ、人情和熟し、御前様、御結構様の和らかき振合、誠に安樂世界、猶行末の榮へを思ひやりて、亦のむかしの茶のみ咄しにもと、しるしぬ、

「予、享保の初め生まれ」とありますから、これは今モデルとしてあげたケースよりもやや年上の場合ですが、だいたい認識は同じで、「五十年來の変化をつらつらと案ずるに、わけて衣食住の三ツ、治れる御代の豊かさに」云々と、天明から文化文政の風俗の移り変わりを記している。「人々の行状、御堅固珍重の堅人は西国の波に漂ひ」贅沢な風潮に反発するような堅物は、どこか遠くの方に吹っ飛ばされてしまい、「不届推参の怒りは奥羽の山に埋もれ」その贅沢な風俗に憤りを発するような人は、どこかの田舎の方に引っ込まざるをえなくなってしまう。江戸の土地にはそんな話の分からない人間はもういなくなって「人情和熟し、御前様、御結構様の和らかき振合、誠に安樂世界」と、モデルケースとは少し前の世代ですが、共通した認識が述べられています。

宝暦を境に江戸がすっかり変わってしまい、それから後は繁榮といいますか、爛熟といいますか、だんだん破滅へ向かいつつあるということは、後世に生まれた我々はそれを歴史的事実として認識することが出来ます。近世の文化には江戸と上方という二つの中心がありましたが、宝暦頃を境に、それまで過去の遺産を食いつぶして優位に立っていた上方が衰え、江戸が上方を凌いで繁榮するようになる、それがだいたい宝暦からです。それ以後江戸は繁榮、それは衰

退・滅亡へ向かうコースを裏に含みながらの繁栄ですが、文化・文政・天保へと至るわけです。

今日の我々は、文化・文政というのが近世の文化のどんづまりの時期である、やがて半世紀のちには近世の文化は滅亡することになるのだということを知っております。けれども江戸時代、その当時の人々は、先ほど申しましたように、情報があるわけではありません。今日の我々のように後から歴史を振り返ってみるという立場にいるわけではなく、その時代の流れの直中にいるわけです。現在自分たちが空気を吸っている文化・文政の江戸の文化というものが衰退に向かいつつあるなどということは、普通の人はおそらく感じなかっただろうと思います。

随筆を著した人々、つまり、風俗の微細な変化、そんなものに深い関心を抱く人々が、絶頂を極める現在の文化が、やがては衰亡に向かうのではないかという不安、恐れ、そんなものを鋭く感じていたのではないかと思います。

表立って出版されます小説のたぐいには、御政道を批判するような感想はほとんど書かれません。資料⑬は曲亭馬琴の「燕石雑誌」という風俗考証の随筆です。

固<sup>まこと</sup>に五十年が程は一睡<sup>いつすい</sup>の夢<sup>ご</sup>の如<sup>ごと</sup>し。限<sup>かぎり</sup>ある浮世<sup>うきよ</sup>の旅なれど、今<sup>いま</sup>に生れあへるものは  
轎<sup>のりもの</sup>に兒<sup>かつが</sup>れ、馬<sup>の</sup>に乗せられて、老<sup>おい</sup>の坂<sup>さか</sup>に登<sup>のぼ</sup>るこゝちす、いと有<sup>あり</sup>がたき僥倖<sup>さいはひ</sup>ならずや。  
三千世界<sup>さんぜんせかい</sup>のくにぐに、住<sup>す</sup>むとしならば、愛<sup>あい</sup>たからぬはあらざめれど、凡天<sup>めいでん</sup>のおほふ  
限<sup>かぎ</sup>り地の載<sup>の</sup>するかぎり、この大江戸にますかたはあらじとまうさんも猶<sup>おほそ</sup>かしこかる  
べし。

馬琴は、先輩の戯作者たちが、御政道にかかわることを書いたためといひますか、書いたという揚げ足を取られ、お上にお咎めを受けたという先例をいくつか知っておりますから、書き方は非常に慎重です。

お江戸の繁栄というものを賛えています。江戸の繁栄を賛える言葉の何割かは本音であろうと思います。しかし、繁栄しているということは、近々衰えるということです。天道満つれば欠くというのは、「易経」にある説で、円満

具足の段階にまでたち到了たものは、後は下降線をたどるんだという思想、これは中国から渡来してきて日本に古くからあります。直接的に易の思想の影響を考えなくとも、「徒然草」でも「花は盛りに月はくまなきものをのみ見るものかは」といふに、完全なものよりは少し欠けたところのあるものをよしとする。今日の我々から見れば、文化・文政の時代といえども、テレビもなければ自動車もない不自由な世界ですけれど、当時の人々、風俗の変遷について敏感な人々にとっては、文化・文政というのは絶頂を極めた時代で、満つれば欠くという天道の摂理に従って、これはいずれ衰退するのではないかという、そういう繁栄に対する恐れとか不安とかいうものがあつただろうと思います。そういう不安を托することが出来る分野というのは、随筆しかなかったと考えられます。

馬琴は「燕石雑誌」で、続けて「鉋」とか「吹革」、「こより」それから色々な紙、そんなものが、昔はなかったのが最近は出来てきて、日常に使われるようになり、非常に便利になったということを書いております。(資料⑭)

鉋かんといふものも寛文年間までなかりしとぞ。和名かんなどはかきなぐる義なるべし。  
吹革ふいこといふものも元禄年間までは罕まれなりしにや、元禄三年七月に開板かいばんしたりし人倫じんりん  
訓蒙図彙きんもうづゑに見えたる鍋なべの鑄ひかけは、火吹竹ひふきだけにて火を吹きおこしてをり、観世紙くわんぜよりは又三郎はじめたりと、西鶴さいくわくが男色大鑑おんどにいへり。かばかりの物もむかしの人はせざりけん、紙すを漉く事のまれなればなるべし。縮紙しゆくし檀紙だんしは平人の用ふべきにあらず、伊豆しゆぜんの修善寺紙じ立野かみの紙なども又しかなり。いにしへは貴も賤も陸奥紙たかき いやしきのみ用ひたりし。かくまでに物乏ものどもしからぬおん時にうまれあひたりけるは、いと有がたき洪福さいはひならずや。

お江戸の繁栄をことほぎ、日常生活の中に色々な便利な道具が入ってきて、生活が快適になったということを、「いと有がたき洪福ならずや」というふうに書いております。生活が便利になった、快適になったということをたしかに書いてはいる。しかしその裏には、快適になり過ぎたことへの恐れ、時代の行く末についての不安のようなものが感じられていたのだらうと思います。

「飛鳥川」の著者は、ものの見方が辛辣なので、資料⑮のようなことをいっ

ております。

新吉原町、元文の頃より、七月、燈籠を出し賑ひけるが、其頃すいびしたると見しが、明和の頃より、八月になれば、俄とて祭の様な事を初しは、猶更衰微なるか、

つまり、吉原の遊里で七月に見世々々が燈籠を軒に吊るし、夜見世が非常に華やかになった、華やかになったのは衰微の始めである。その後、明和頃からまた新しい行事が出来た。俄というのは、屋台のようなものを作って派手な扮装をした男女が踊ったり、ちょっとした寸劇をやったりする催しですが、こんなものが出来たからには、いよいよ衰微の始まりだと見る。ことさらに賑やかなこと、華やかなことが企画されたときは、それは衰えかかっている証拠なんだという、非常に皮肉なものの見方を示しています。そうしますと、こういうふうにはっきり言わない場合でも、すべてこういうものの見方が背後にあるのだということが推測されます。(資料⑯)

昔、髪結所に、障子へやうやう紋所など付るぐらい成しに、近来、明智左馬介湖水渡りの所など染たる暖簾、其外、所々に目を驚す暖簾懸る事に成しは、何の故ぞや、洗湯も、昔は火烧口を赤く塗光らせる計、近来、是も我先と立派に作り、別て元両国若松町和泉屋と云銭湯、近所の中にも宜敷と云、二階に、煎じ茶、菓子杯出すは何事ぞや、

近世の髪結床は、表に面した障子に客の目を引きつけるために何か絵を書いておくという習慣がありました。それが、昔はその家の紋所ぐらいの、あまり派手な模様じゃなかったのが、だんだん派手になってきます。式亭三馬の「浮世床」を見ますと、道路に面した障子に大きな海老の絵が書いてある。客の目を引くために障子の模様が派手になってきた、それは何の故ぞと書かれております。派手になったというのは衰微の証拠だということを結びつけますと、作者の言いたいところはおのずから推測されます。

豆腐屋は、朝七ツ時より仕込をして、朝飯の間に合様にしたるが、近年は、宵越の豆腐を朝売に出る。(資料⑰)

とあります。

文明が進んで、世の中が万事こうでなくては間に合わない、忙しい世相になってきたと、何の批判もつけ加えずに書いております。

また、子供寄あつまり、咄合杯互にいたすに、大方、爺は山へ柴かり、婆々は川へ洗濯などと云昔咄し専也しに、今は、虫拳、狐拳、本の拳などするもおかし。

(資料⑱)

「拳」というのは、今のじゃんけんもそれから派生したのですが、本来は遊里でやる大人の遊びです。二人ないしは三人が指で色々格好をして、合図とともに両方がパットそれを見せて勝ち負けを争うという遊びです。子供が昔話などというものをやらなくなって、大人の遊び、拳などをやるようになったと書かれています。

子供の風俗が変質し、子供が変にませてひねこびたことをするようになったということを、時代の衰微に敏感な人達は、共通してある憂いの気持ちをもって眺めていたようです。資料⑲にあげましたのは山東京伝の弟の京山の「蛛の糸巻」という随筆です。

(廿九) 子どもの遊び

寛文の頃は、十五六のむすめ竹馬にのりて遊し事を、正徳の頃、寛文より五十年のち<sup>五</sup>自笑が京板書し物にみえたり、今おもへばうそらしけれど、ま事にありし事なめり、今より六十年前の頃は、市中の街上にて、十より以上以下男女の兒ともうちまじりて、目かくし、鬼兒ッこ、はしらどツつき、ざうりかくし、かくれんぼなど、唱へて、夏の夕ぐれなど、ゆき、の妨げになるほどむらがり遊びしに、今さる事する兒どもなきは、さかしくなりしにや、おのれをなき時と、今の子ども遊びのかはりし事、猶さまざまあり、

子供がだんだん大人っぽくなってきている、寛文の頃は十五六の女の子でも竹馬に乗っていたのが、そんなことがなくなった、などと記しています。子供の遊びの変化というところに目を留めて、子供が妙に知恵がつき、ひねこびている様子がとらえられています。

それから、資料⑳にあげましたのは、お菓子の変遷です。

### (十三) 菓子の変格

天明の修風なるも、いまだ菓子には移らず、まんぢゅう、やうかんを最上としたるに、鶯餅、一名を仕切場と唱へ、茶店にも用ひ、通人の称美したる物なるに、今は駄菓子屋物となりて、おツかあ四文くんねへのいやしき小児の物となりぬ、しかるに、菓子追々奢侈にうつり、寛政のはじめ、大久保主水の菓子、杜氏のはて喜太郎といひし者、……練羊羹といふ物を製しはじめけるに、今のやうにさゝをりといふ物もなければ、口に奢る者、重箱をもたせて取にやるに、けふはうりきれたりとてむなしくかへる、さらばあすとて、ねりやうかんの為に招きたる客をかへす程の称美としたるに、今は諸国にもある中に、日光なるは、江戸にまされり、僅に六十年の変化、素の侈に移りし事、菓子に於ても如斯、

贅沢の頂点を極めていたはずの天明の頃に上等な菓子であった鶯餅が、最近では子供の駄菓子になってしまった。それよりもっといいものができたからです。要するに、お菓子のようなものにまで、「僅かに六十年の変化、素の侈に移りし事、菓子に於いても斯のごとし」というように述べている。どんなものも見逃さず、物事が贅沢になってゆく風俗をとらえています。

こういう物の見方をする人々にとっては、京伝のいう「わたくしざまのいささけきこと」「こまやかなること」は非常に重要な意味を持つわけです。我々のように物事を抽象化するという習慣がない人は、こういう自分の実感に即した形で「贅沢」をとらえる。やがては衰えるのではないかという恐れをひき起こす兆しとして、風俗の変遷というものをとらえるわけです。

もう一度、京伝が最初に書いていた、建て前のお説教を述べているに違いないといって我々が読みとばすところの、贅沢の戒めとして風俗の変遷に注目するというくだりを読み直してみます。するとこれは、自分たちがその空気を吸っている現在の文明が、もしかしたら衰退に向かいつつあるのではないかという不安、恐れを内包した感慨だと思われます。決して建て前として見過ごしにすることの出来ない、ある切実な思いが込められた文章であることが読み取れるのです。

今日の我々が、例えば離婚率が非常に高くなっているから、近い将来、一夫一婦制をもとにした家庭などというものは崩壊するのではないかと考える、そ



ういうふうには抽象化して近代文明の行く末を考えるのではなく、物そのものに即して、文明の、満つれば欠くという摂理を感じとる。文明の衰退ということについての恐れというものは、もしかしたら今日の我々よりも切実であったのではないかと思います。

そういう思いを書き現すことができる分野、受けとめることができる分野というのは、これは随筆しかなかったのであります。

後世の我々にとって、文化・文政期を中心に現れた風俗考証、あるいは見聞記の随筆というのは、江戸文化がそろそろ終幕を迎える時になって、それまでの江戸文化の締めくくりのような役割を果たしているのではないか。考証随筆や見聞記を読むことによって、江戸時代の風俗の変遷のあらましをたどることが出来るのですが、江戸文化の幕引きのようなところにちょうど位置する作品が考証随筆であると、今日の我々はとらえることができます。それを書いた作者たち自身もやはり、もしかしたら今のこの文明が滅びるのではないかと、意識無意識の境にあるような漠然としたものだったにしても、感じていたように思います。だからこそ自分が見聞きしたものをできるだけ大切に、克明に記録に残したという、そういう思いでいたのではないのでしょうか。そんな思いが、この飽くこともなく民間の些末な出来事を克明に記録するという、膨大な随筆の山を残させたのだらうと思います。